

しゃくじょう 吾北地区「錫杖カタシ」が里帰り



3月31日（日）に吾北地区上八川柿藪の上東小学校(休校)で「第22回吾北・カタシの花祭り」が開催されました。

「カタシ」というのは、高知の方言で藪椿のことです。上東小学校近くに生育していた藪椿の巨樹は、樹形が僧侶や山伏の持つ錫杖しゃくじょうに似ることから、「錫杖カタシ」の愛称で呼ばれていました。木の根元には祠があり、狩りの名人であった弥十郎という人物を祭ったものだそうです。また山伏に姿を変えた平家の落ち武者を祭り、その墓印に藪椿が植えられたという説もあります。

いずれにしても、その人物は子ども好きだったらしく、「カタシに登って遊んでも落ちて怪我をする子どもはいない」という言い伝えが残っています。

「錫杖カタシ」の樹齢は400年とも700年とも言われ、1995年、映画『絵の中のぼくの村』のロケ地になりました。またその翌年、県の天然記念物に指定されました。しかし近年、樹勢が弱り始め、完全に枯れたため今年1月9日に伐採されました。

3月31日の「カタシの花祭り」では、学校の職員室に「錫杖カタシ」の立派な幹の輪切りと、その挿し木苗も展示されていました。

2012年、全国の巨樹・銘木などを後生に受け継ぐ「林木遺伝子銀行110番」事業で、森林総合研究所関西育種場（岡山県）に挿し木を依頼し、その苗が里帰りしたのです。

お祭りに訪れた方々は「錫杖カタシ」の年輪を数えたり、苗の花を見学したりしました。

しばらく「錫杖カタシ」に登る子ども達の姿は見られませんが、この分身の苗が育つ何十年か何百年後、再び子ども達が、木の上で元気に遊ぶ姿が見られることでしょう。

それまで大事に育ててほしいものです。



「錫杖カタシ」の幹と里帰した挿し木苗



錫杖カタシの切株（周囲約3.2m）



第22回「吾北・カタシの花祭り」の様子